文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 17, p. 49 ～ 62, 2016. 3

幼児の自由な表現を尊重した劇遊びの実践的研究
―大ホールにおける発表会に向けての保育者の指導経過と子どもの変容―

金子　智栄子*・櫻井　ひとみ**・金子　智昭***・金子　功一****

4歳児クラス担任のベテラン保育者Sの実践から，発表（上演）の場としての「クリスマス会」を取り上げ，劇遊びの練習に入る前まで，練習期間，発表，発表後に区切って，保育経過や保育者の工夫，さらには子どもの変容について検討し，劇遊びの指導方法を理論化することを試みた．劇遊びのプロセスには領域の積み上げが要求されるため，年度当初からどのような保育が展開されたか，それまでの日常の保育の質が大切となった．劇遊びの演目を設定する際には，子どもの興味，保育者の教育方針，園の期待の3者の立場から接点を見つけるが，特に保育者が潜在している子どもの興味や関心の対象を発見し，単なる興味や関心のレベルではなく，それを表現したいという欲求にまで育てていくことが重要である．練習においては，視聴覚教材によるイメージづくり，自由で主体的なリズム遊び（ダンス）を通しての選曲や配役，相互に見学して意見を述べ合うことでの修正，背景の制作や衣装着用によるイメージの共有化と構築，保護者の参観による臨場感など，状況に合わせて活用していくことになる．本番に当たっては，今までの努力を振り返り，自分たちは「できる」という実感を持たせることが必要である．発表後は成果を共有して，その後の活動への自信につなげることが大切である．劇遊びの効果は，自己表現，協同性・協力性において顕著に示された．

Key Words：劇遊び，発表会，4歳児

1．はじめに

八木・喜多村（1982）によると，保育における劇活動への概念は，我が国では主に2つあり，①児童劇として，大人の芸術形態における演劇の子ども版として考える立場，②ごっこ遊びを土台とした遊びとして考える立場である．②は，①の見せることを目的とした児童劇を否定する立場で，保育では子どもたちの主体的で内的な活動を重視しており，子どもが他者のまなざしを意識することで，自由な表現が妨げられると考えられている．

現在，幼稚園や保育所では，生活発表会やクリスマス会と称されて，合奏や合唱，ダンス，劇を中心にした表現の形態での発表の場が設定されていることが多い．実際に劇の発表が大きなステージで，いわば上演というような形式で実施され，劇作品としての完成度が追及されているケースも

＊人間学部児童発達学科
＊＊秩父緑ガ丘幼稚園
＊＊＊慶応義塾大学大学院社会学研究科
＊＊＊＊埼玉純真短期大学

散見する．発表会の規模が大きくなるほど，園の教育成果をアピールする場となり，園の評判ともなりうる．特に少子化で園児募集に苦慮する幼稚園が増えている昨今，必然的に園の重要な行事となり，園ばかりでなく保育者の指導能力の評価ともなりかねない．南（1999）は，自らの保育者体験から，発表会での劇の出来不出来が保育者の力量という暗黙の了解を意識して，それが間違った考えであっても焦らずにはいられないという心情を述べている．八木・喜多村（1982）は，劇の発表会は保育者にとって苦役であり，保護者に見せることが精神的プレッシャーとなり，見栄えを意識した保育者中心の指導を招きやすいことを指摘している．さらに，南（1999）は，新卒保育者である自分が，経過が予測できない不安を抱えながら，発表会のためにどのように劇を創造していったか, その模索を記述している．保育者は，子どもの自由な表現を尊重した劇遊びを望むものの，園の期待を察知し自分自身に対する評価をも気にするがゆえに，子どもたちに強制的な指導を行ってしまうこともあると考える．

劇遊びは，保育者が子どもたち一人ひとりの心の動きを捉え，発表作品へと導くために多様な技術が必要とされる．さらに，劇遊びの指導のプロセスには，保育者の一方的な教え込みにならないようにし，子どもたちの個々の表現を大切にするなど，保育者の配慮や工夫が求められる．そのような保育者の関わりのもとで，子どもたちが表現することを楽しみ，自信に満ちて，観客に見せたいという欲求が生じ，それが「劇」としての完成度を高めると考える．劇の「出来栄え」に対する園の期待に応えながらも，子どもの自由な表現を尊重した劇遊びについての指導方法を明示することは，他の保育者，特に南（1999）のような新任保育者にとってはかなり参考になると考える．

本論文では，保育歴 15 年のベテラン保育者Ｓの劇遊びにおける実践を検討し，劇遊びの積み重ねが，観客を意識した完成度の高い「劇」に到達する過程を検討する．Ｓ保育者の勤務する園では，２学期末に「クリスマス会」が文化会館で開催される．そこで，Ｓ保育者は，子どもたちの興味や関心をもとに，劇遊びのテーマを「ライオンキング」とした．それは，上演という意味でもふさわしい題名であった．Ｓ保育者は子どもの自由な表現を尊重した保育を展開し，大舞台での上演というレベルにまで劇（遊び）を発展させた．この経過は，同僚保育者たちが認めるところであり，実際に劇の終了時に，子どもたちから「もっとやりたい！」との声があがり，その後は遊びが継続し発展していった．

筆者らは，Ｓ保育者の保育実践記録を基に，どのように子どもたちの興味や関心を高め，自由な表現遊びを劇遊びへと導いていったのかを分析した．保育者は実践家として個々の子どもたちの状況に合わせて適切に対応し，豊かな発想に支えられながら，素晴らしい保育を展開している．しかし，豊富な経験や鋭い感性を有するがゆえに，感覚的に実践されていることが多いようである．Ｓ保育者も経験豊かな実践家であり，研究者である筆者らと協働することで，その実践を分析して理論化し，さらに他の保育実践においても参考になるべく普遍化することを目的とした．

Ｓ保育者が特に劇遊びに関心を示したのは，小学校の授業参観で，卒園児が個人的には高度な能力を有していることから，集団内の自己発揮をもさらに伸ばしたいと考えたからである．そこで，人前で演じるという「劇遊び」を子どもたちに体験させることで，自己表現力を向上させていくことを考えた．

劇遊びは，保育内容の「表現」領域に該当すると考えられている．実際に，幼稚園教育要領（平成 20 年改訂）の感性と表現に関する領域『表現』には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」ことを目的とし，ねらいとして「(1）いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ．(2）感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ．(3）生活の中でイメージを豊かにし，様々な表現を楽しむ」と明記されている．そしてねらいを達成するために幼児が経験することの内容の一つに「自分のイメージを動きやことばなどで表現したり，演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」とあり，内容の取扱い（3）に，「生活経験や発達に応じ，

自ら様々な表現を楽しみ，表現する意欲を十分に発揮させることができるように，遊具や用具などを整えたり，他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし，表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるよう工夫すること」とある．

八木・喜多村（1982）は，劇遊びの教育的意義として，①日常生活の量的質的拡充，②想像・思考・認識力と表現力の拡充，③集団創造による個の飛躍的な発達，④主体性強化，⑤創造的な総合活動を挙げ，各領域の系統的積み上げと，クラス集団や生活全般の積み重ねが条件として必要であるとしている．したがって，劇遊びの指導には，練習を始める前までに子ども個人ばかりでなく，クラス集団を育てておくことが必要であり，日常の保育のあり方が重要となってくると考える．

藤野・成田・世古・宮串（2004）は，劇遊びの特徴として，次の点を挙げている．①大人が介在して比較的長期にわたる協同的活動が展開される．劇遊びと類似したものとしてごっこ遊びがあげられるが，ごっこ遊びの多くが自発的に参加していた子どもにより即興的に始まって展開し消滅するのに対して，劇遊びは大人と子どもが協同で活動を展開していく．その活動が翌日の活動の準備段階としての意味をもつようになり，子ども同士の協力が必要になる．②言語や象徴化がモデルの働きをする．つまり，劇遊びの題材とされた絵本などが，物語世界のイメージと関連し，役決めや道具制作の際に再び活性化される．さらに，劇の練習を通して繰り返し参照され，時には修正される．③最終的に劇遊びを作品として眺める観客が存在する．つまり，子どもたちは，劇遊びを通して自分たちのやり取りを，第三者の視点から眺めて意識するようになり，観客に見せる「出来栄え」を目標として活動が進められる．そこで，自分たちの活動を反省的に振り返り，協同して次の活動を作っていくようになり，新しい自己評価が生まれて，個人が心理的に発達するばかりでなく協同形態にも新しい質が出現する．

劇遊びは，長期的に主体的活動が展開される遊びであり，保護者などの観客の前で発表するというその性質から，保育者同士，保育者と子ども，子どもたち，保護者と保育者，保護者と子どもなどの多様な人間関係においても協同的な行為が生まれ，それが保育・教育の効果を促進させると考える．

本研究では，幼児の自由な表現を尊重した劇遊びについて保育現場での実践を通して，「表現する過程」を大切にした劇遊びの指導方法を検討していく．そこで，保育者Ｓの実践から，発表の場として「クリスマス会」を取り上げ，劇遊びの練習に入る前まで，練習期間，発表，発表後に区切って，4 歳児クラスの様子と保育者の実践との関連について検討していく．劇遊びのプロセスを，年度当初から，保育者の指導方法と幼児の変化との関連を視点に分析することで，自己表現力を高める保育実践を理論化することを目的とする．

2. 対象園の概要について

関東地方の自然に恵まれた環境で，年少・年中・年長児の各 2 クラスで計 6 クラス．保育目標は，「明るく元気な子，思いやりのある子，最後まで頑張る子，よく考える子」である．保育方針は，「①園児の最善を考え，よりよい教育環境を構築する，②在園中に多様な体験が得られるように計画する，③ひとりひとりを認め，やる気を伸ばす，④自主性を尊重し少人数ならではの丁寧な指導を実践する」である．

3. 対象クラス（年中児）について

担任はＳ保育者で保育経験 15 年，人数は男児が 9 名（誕生月は 4 月が 3 名，5・6・9・10・1・3 月が各 1 名），女児が 6 名（誕生月は 4 月が 3 名，6 月が 2 名，11 月が 1 名）で計 15 名．年間教育目標は，「保育者や友だちとのふれあいを楽しみながら，いろいろな活動に興味をもち意欲的に遊んだり，取り組んだりする」である．保育方針は，「①園生活に慣れ喜んでいろいろな活動に取り組み，日常生活に必要な習慣や態度を身に付ける，②身近な社会や自然の事象に興味や関心を持ち，発見を楽しんだり考えたりして生活に取り入れる，③いろいろな遊びに興味を持ち，保育者や友だちとのかかわりを広げる，④いろいろな経

験を通して生活に必要な言葉を身に付ける」である．

4. クリスマス発表会について

毎年2学期の終わりに行う発表会で，大きな舞台が設置された公的施設にて実施される．1学期から積み重ねられた体験のまとめとして位置づけられており，保護者に教育成果を披露する重要な行事である．各年齢の発達にあわせて遊戯や合唱・合奏，劇を行い，他者に見られるという体験が，子どもばかりでなく，保育者をも成長させる貴重な機会を提供している．

5. 劇遊びの練習に至るまでの保育経過（平成26年度）

保育日誌から抜粋した記録とその解釈は，付録1を参照されたい．

年度当初より，「ミーティング」と称する話し合いの場を構成し，子どもたちが自由に自分の意見を言い，他者の意見をも聞く機会を作る．

1）4～5月：子ども一人ひとりが自由に体を使って遊び込み，遊びの種類が増えていく中で，友だち関係を育む機会を作り，意欲を育てる→保育者は子どもの発想をキャッチして遊びを膨らませて共に楽しむ→各領域が複合的に関連するようになり，ひとつの目的に向かって友だちと協力する場面も見られる→ダンゴ虫に興味を示す（事例1，付録参照）

2）6～7月：友だちや保育者との安心した関係の中で周囲のことに気づく→その気づきを表現し共有する→ツバメやクロスジカミキリに強い関心を示す→「生き物」への興味を高めるために保育者の配慮でザリガニを飼育→ザリガニの脱皮と共食い（事例2，付録参照）で「生きる」凄さを実感→「生き物」への興味が高まり，調べる活動→ごっこ遊びが盛んになり，劇遊びの土台が形成

3）9月：夏休みの体験の共有→運動会の練習で協力・発案・リードなどが見られ，クラスのまとまりが強くなる→実体験を基にして気づきが多くなり，疑問をもって図鑑で調べる子どもも出てくる

4）10月：運動会で自信がつく→サツマイモ掘りでは，子どもたちは生命力を実感し，カマキリの共食い（事例3，付録参照）から「生きる」残酷さを学ぶ→野生動物に関心が拡大し，子どもたちの興味や関心からクリスマス会の演目を「ライオンキング」に決める

4月から5月は，最初に自由に体を使って遊び込み，友だちとの関係を育むことで，各領域が複合された組織的な遊びへと発展し，友だちと協力できるようにもなる．安心して触れるダンゴ虫に興味を示し，愛着を形成する（事例1）．6月から7月は，友だちと安定した関係の中で，周囲のことに気づき，それを表現し共有する経過の中で，ごっこ遊びが盛んになり，劇遊びの土台が形成される．ツバメやザリガニ（事例2）との関わりから，生きることの凄さを実感する．9月から10月は，運動会の練習で協力・発案・リードが見られ，クラスのまとまりが出てくる．実体験を基にした気づきが多くなり，疑問を持って図鑑で調べる子どもも出てくる．サツマイモ掘りでは盛大に伸びた蔓，カマキリの共食い（事例3）で生きることの凄さを学び，野生動物に関心が発展し，クリスマス会の演目を子どもたちと相談して「ライオンキング」とする．

6. 演目選定の理由

選定理由は次の3点である．① 子どもたちの興味や関心が「生き物」にあったこと，② 保育者自身に子どもたちにたくましく生きていってほしいという願いがあり，子どもたちに「生きること」のたくましさと残酷さを実感させたかったこと，③「ライオンキング」は劇団四季で上演されており，知名度から園の期待に応えられるものであったこと．

あらすじは，「動物たちの王として尊敬を集めるライオンのムファサは幼い息子のシンバを残して，弟スカーの陰謀により殺される．シンバはその死の責任を負わされて王国から追放されるが，成長してスカーを倒して王座を奪還し，王国には

再び平和が訪れる」である.

7. 発表会に向けての準備，発表会当日（11 月上旬から 12 月中旬）

1）1 週目：子どもたちとイメージづくり

(1) 活動内容と教師の配慮：「ライオンキング（DVD）」を視聴して，ミーティングで話し合い，絵本を用いてストーリーをふり返ったり，内容を理解できるよう「劇団四季：ライオンキング」の CD を自由遊びや食後に流したりして，子どもたちが親しむように工夫した.

(2) 子どもの様子：多くの動物が登場したこと，召使の鳥（ザズ）とライオンの子ども（シンバ）がやり取りをしたこと，特に男児は，ライオン同士の戦いにも興味を示した．ライオンの王座争いの場面を見て手に力が入り，思わず「だめだよ！」と目に涙を浮かべた男児もおり，「生きること」の厳しさを感じていた.

2）2 週目：選曲・踊り・役決め

(1) 活動内容と教師の配慮：「劇団四季：ライオンキング」の CD を聴き，ミーティングにより次の 4 場面ごとに各 1 曲を選ぶ.

- オープニング：「サークル・オブ・ライフ」の曲で，全員が揃って幕開き
- 1 場面：曲は「早く王様になりたい」で，全員（シンバ，スカー，ザズ）が踊る
- 2 場面：曲は「覚悟しろ & シンバとスカーの対決」で男児のみ
- 3 場面：曲は「キング・オブ・プライドロック」で，シンバ，ナラ，ラフィキ役のみ
- 4 場面：曲は「サークル・オブ・ライフ」で，全員で踊る

子どもたち一人ひとりの話に耳を傾け，イメージしやすいような言葉がけをするとともに，友だちの話を聴くように促す．特に，自分の意見を伝えられない子どもには，段々と話せるよう導いた．さらに，場面に合わせた振付を保育者と考え，どんな動物が出てきたか話し合いながら，配役を決める.

(2) 子どもの様子

配役は，主役のシンバ（王子）に人気が集中したが，ザズ（召使）の面白さに魅かれた子もいた．人気のない役もあったが，4 歳児ということもあって拒否する子はいなかった．恥ずかしがって演じたがらない子もいたが，話し合いを重ねて何とか決定した.

3）3 週目：練習スタート

(1) 活動内容と教師の配慮：CD に合わせての踊りの練習では，最初は全員で踊って，役について共通に理解できるようにする．徐々に配役を中心に踊るようにするが，見学している子どもから意見をもらうようにもする.

(2) 子どもの活動：踊ることに夢中な友だちに影響をされて，恥ずかしさもだんだんとなくなり，踊りの中で友だちとのやり取りも楽しむ．自分の振りで精一杯だったが，徐々に「みんなで…」と集団を意識するようになる．さらに，意見や感想を言い合うことで，互いを認め合うようになる.

4）4 週目：ホールでの練習

(1) 活動内容と教師の配慮：広いホールで練習することで，動き方の違いに気づけるように導く.

(2) 子どもの活動：開放感のあるホールでの練習を友だちと共に楽しみ，今までより大きく表現をするようになる．この頃になると，練習に飽きてしまう子どもが出てくる.

5）5 週目：他のクラスのお遊戯を見学・大道具作り

(1) 活動内容と教師の配慮：練習をしながら，舞台の飾りをどのようにするのかを話し合う．その際，動物図鑑や DVD を用いて感じたことを話し合った．子どもたちのイメージを基に，どのような動物を登場させるか，どのような材料を用いて作るか，具体的に考えていけるよう導く．また，他のクラスの踊りを見て，自分たちも頑張ろうという気持ちになる.

(2) 子どもの活動：飾り作りは，発表会に向け

ての意識を高め，協力体制を向上させた．他のクラスの友だちに見てもらい褒められることで，演技への集中度を高め，より工夫するようになった．

６）６週目：発表会リハーサルと衣装合わせ

(1) 活動内容と教師の配慮：セットとして動物を飾り，衣装を着てリハーサルに参加する．リハーサルには，ＰＴＡ役員に参加してもらい，少人数ではあるが本番の緊張感を経験するようにした．

(2) 子どもの活動：緊張はあるものの，衣装を着たことで，互いに見せ合ったり，成りきって踊ったりしていた．

７）発表会前日：

ミーティングにて，子どもたち全員が自分の思いを発表し，今まで頑張ってきた練習を振り返り，家族に見てもらいたいという気持ちを強めて，“明日みんなでがんばろう”と心をひとつにした．

８）発表会当日：

衣装部屋では役員の保護者が，衣装を身に付ける手伝いをしてくれた．支度ができると，友だち同士で見せ合う余裕もあったが，リーダー格のＫ子が「先生，ドキドキしてきた！緊張しちゃう」と不安を訴えた．保育者の励ましにより，Ｋ子は「分かった！じゃあみんな，頑張ろうね」とクラスをまとめ，みんなの士気を高めた．

場面転換の際に，どちらに戻ってくるか分からなくなった子．しかし，舞台の脇にいた子どもが，「こっちこっち！」と，小さな声とジェスチャーで呼び寄せていた．気づいたＭ子は，戻れたことに安堵の表情を見せた．

クライマックス，全員で舞台にたちフィナーレ，一人ひとりの表情がとびっきりの笑顔になり，互いに見合い楽しそうに踊る．保育者も今すぐそこに参加したいという雰囲気であった．着ていた衣装を脱ぐときに，子どもたちから「またやりたい！」という声が聞こえてきた．すべてを終え，子どもたちは保護者と帰り支度をし，ロビーへ．迎えた保育者は一人ひとりにプレゼントと共に，今日のがんばりを話す．保護者も子どもたちの姿に感動をし，喜んだ．子ども・保護者・保育者の三者が一体となる瞬間でもあった．

8. 劇遊びによる子どもへの効果

（　）内に伸長したと考えられる特徴を記載した．

１）クラス全体の変容

１つのものを作り上げるには，自分だけではできない．保育者や友だちと意見を出し合い（自己表現），意見のぶつかりもあって徐々に思いや考えを受容し合えるようになっていく（相互受容）．そこで，自分の思いを受けてもらう嬉しさより，友だちの話にも耳を傾けるようになる．また，いろいろな困難にぶつかった時に，「みんなで」という思いからその困難にも立ち向かい（協力性），互いに助け合っていけるようになる（援助性）．練習の中でも，与えられたという意識ではなく，みんなで作ったものだからこそひとつひとつが大切な活動（主体性，協力性），かかわりであることを子どもたちが肌で感じていた．

２）子ども個人の変容

Ａ男：自分なりに思い込む面が強かったが，自分の考えを伝えて友だちと共に楽しむようになってきた．（自己表現，協同性）

Ｂ男：気の合う友だちも出てきて，自分の思いを伝えられるようになる．友だちと踊る楽しさも感じられるようにもなる．（自己表現，協同性）

Ｃ男：褒めてもらうことや，認めてもらう喜びから「できた」という自信が持てるようになる．友だちの踊る様子をじっと見て，自分の出番になると喜んで参加していた．（自信，協同性）

Ｄ男：シンバ役を行うこととなり「緊張する」と言っていたが，練習を重ねる中で自信を持ってできるようになる．また，様々な気づきをミーティングの中でつたえることができていた．（自信，自己表現）

Ｅ男：表現活動を通して，保育者や友だちが認

めてくれることを喜ぶ．その体験から，友だちの感情や考えを素直に受け入れるようになる．
（自己表現，他者受容）

F男：役になりきってダイナミックに表現し，踊る楽しさを共有できるようになる．
（自己表現，協同性）

G男：「一緒にやってみたい」という思いが出てきて，踊りを覚える．その踊りを友だちと共にできる喜びから，見てもらいたいという思いも出てくる．
（協同性，自己表現）

H男：練習の中で「待つ」などのルールを守ることの大切さを知り，徐々に身に付いてきて友だちに「こうやるんだよ」と友だちに伝えたりするようになる．また，思いを共有し合えるようになると，友だちと踊る楽しさも感じて行える．
（道徳性，自己表現，協同性）

I男：曲に合わせて踊りのイメージを共有し，楽しんで踊る．自分の思いを言葉で伝えられる喜びを感じていた．
（共感性，自己表現）

J子：友だちとのかかわりが増え，自分の思いや考えを伝える楽しさを味わうようになる．ナラ役を立候補して，場面に合わせてタイミングを見て登場でき，シンバ役のD男とどのように表現するか相談をして取り組む姿が見られた．
（自己表現，協力性）

K子：様々な事に積極的に取り組めるようになり，「こうしてみたい」という気持ちで取り組めるようになる．練習でも，友だちの面倒を見る姿があった．自ら表現する楽しさも味わえて，表情も豊かになる．
（積極性，自己表現，援助性）

L子：遊びの中でも役割を持って工夫していくようになる．また，発表会の練習では，ラフィキ役を行い，日に日に自ら表現する喜びも感じられるようになった．
（工夫，自己表現）

M子：本人らしさが出せることを大切にしてかかわると，受容してもらえる嬉しさより少しずつ表情が豊かになってきた．また，練習では友だちと一緒に楽しむようになり，その体験から踊りにも興味を持つようになる．本番では友だちの手を取り自ら元気よく踊る姿が見られた．
（自己表現，協同性，協力性）

N子：様々な活動や友だちとのかかわりの中で，「みんなと共に協力しよう」という思いを抱いて取り組むようになる．その思いは，周囲の子どもたちにも伝わり「どのようにしていこうかな？」という話し合いの中心役となっていった．練習でも，多くのアイディアを出してどのように進めるかを考え，声をかけ合ったりしていた．それぞれの良さも受けとめる姿も見られた．（協力性，リーダー性，自己表現，他者受容）

O子：字が書けるようになると，話し合ったことを紙に書く役目をし，自信が持てるようになる．保育者や友だちからラフィキ役を進められるが，演じ方の不安から受けなかった．しかし，練習の後半にラフィキ役のL子が数日間休むと，代役を引き受け，演じることができ，これが大きな自信となった．（自信，自己表現）

3）子どもたちの変容のまとめ

全体では，自己表現，相互受容，協力性，援助性，主体性の向上が見られた．

個別では，自己表現の伸長が，A男，B男，D男，E男，F男，G男，H男，I男，J子，K子，L子，M子，N子，O子の14人（15人中，93.3％）に現れ，協同性・協力性の向上が，A男，B男，C男，F男，G男，H男，J子，M子，N子の9人（60.0％）に見られた．「自信」が3人（C男，D男，O子）で20.0％，「他者受容」が2人（E男，N子），その他，「道徳性」がH男，「共感性」がI男，「積極性」と「援助性」がK子，「工夫」がL子，「リーダー性」がN子の各1名だった．自己表現や協同性・協力性への効果が大きいこと予想された．

9. 発表会後の子どもたちの様子

3学期が始まり，発表会の経験を基にした遊びは継続したが，ひとりひとりが自信を持って様々なことに挑戦したいという姿が見られた．ミーティングでは，自分の意見を言い，友だちの話を聴く姿勢が定着してきた．子どもたちは「生きもの」に興味や関心を示したが，その「生きもの」が存在するのが地球であることを知る．その地球には他にどんなものがあるかという子どもの興味が発展して，「宇宙」について知る．これが2月半ばの作品展につながっていった．

10. 劇遊びにおける指導の工夫

1）劇遊びの練習を始める前

(1）子どもたちのレディネス（準備状態）について

友だちや保育者との安定した関係の中で，身近な事に気づき，その気づきを表現し共有する．お互いに協力し発案する．さらにはリーダー的な子どもの存在も，劇遊びを発展させる原動力になると考える．運動会などの経験をもとに，人に見られる体験や，やり遂げた自信も必要である．

年度当初からのミーティングが常に子どもたちの自己表現の場であり，思考，創造・想像，思いやり，協同・協力などを育んだと考える．また，保育者が，子どもたちの気づきを捉え，共有し発展させ，それを保育者自身が楽しんでいることが重要と考える．

2）劇のテーマとなる「生き物」への興味や関心を育てる

4月から5月は，安心して触れるダンゴ虫に興味を示し，愛着を形成する（事例1）．ダンゴ虫の特徴は，① 攻撃しないので安心してさわれる，② 地面を歩くし，丸まると動かないので捕まえやすい，③ 触ると丸まることで知的好奇心や自己効力感が生じる，④ 形状から愛着が湧くなどで，「生き物」として子どもが最初に関わるには最適と考える．6月から7月はツバメの巣作りの失敗，ザリガニの脱皮や共食い（事例2）から，生きることの凄さを実感する．ダンゴ虫の穏やかで愛くるしい存在から，生きることの凄さへと「生き物」の捉え方が変化する．9月から10月は，サツマイモ掘りでは盛大に伸びた蔓，カマキリの共食い（事例3）で生きることの凄さを学び，野生動物に関心が発展し，クリスマス会の演目を子どもたちと相談して「ライオンキング」とする．この経過の中には，ザリガニを飼育したり，生き物の図鑑を用意したりと，子どもたちが生き物に直接的間接的に関われる環境を保育者が用意したことが，興味や関心を育てたと考える．

3）演目の設定

子どもたちの興味や関心，保育者自身の保育目標，園の期待を考慮する．

4）発表会に向けての準備

1週目はイメージづくりのため，DVD，絵本，CDの視聴覚教材を用いるが，ミーティングでの話し合いを充実させる．また，子どもたちが曲に親しめるようにリラックスしている間に流すように工夫する．2週目は「選曲・踊り・役決め」で子どもたちの意見を尊重して話し合いながら進める．ここでもミーティングが重要な役割を担う．3週目から練習が始まるが，役を共有するよう最初は全員で踊り，次第に配役が中心になり，見学者からの意見で修正できるようにする．4週目はホールでの練習となり，広い場所での動き方の違いに気づかせる．5週目は，他のクラスの遊戯を見学して刺激を高め，大道具作りでさらにイメージを膨らませ，発表の現実性を高める．6週目のリハーサルでは少人数の保護者が見学することで，観客を意識させ，衣装合わせでは役になりきる機会を提供する．

子どもたちは，劇遊びの「出来栄え」を意識してより良い作品にしようという意欲を高めるため，他者の意見を真剣に聴くようになる．年度当初より，女児の勢力が強かったが，女児も男児の意見を取り入れようとし，男女間の人間関係にバランスが取れて，協同体制が強まった．リハーサルに保護者が観客として加わることで臨場感が生

じ，子どもたちの「演じたい」という欲求を高める．また，保護者も子どもたちの頑張っている姿を見て応援する姿勢を高め，保護者の協力は，保育者にとっても大きな励みとなる．このような子ども，保護者，保育者の相互関連が劇遊びの活動を促進させると考える．

５）発表前日

今までの活動を振り返って自信を持たせて，人に披露する楽しみを感じさせる．また，発表当日は，保育者は正面ではなく，舞台の袖に控えていることも確認し，子どもたちが混乱しないようにする．

６）発表会当日

リーダー的存在の子どもを伴って，緊張を表出させてリラックスさせ，士気を高めるよう配慮する．自分は「素晴らしい」「かっこいい」「綺麗」など自己肯定感を高め，自己顕示欲を強める．今までの成果を確認し，たとえ間違ってもみんながカバーするような協同や協力の雰囲気を作る．

７）発表会後

子ども個人の頑張りを，クラス全員のみならず保護者をも交えて認め合い，達成感を共有する．劇遊びを継続して，その後の活動に結び付けていく．

11．まとめと吟味

保育者Ｓの実践から，発表（上演）の場としての「クリスマス会」を取り上げ，劇遊びの練習に入る前まで，練習期間，発表，発表後に区切って，保育経過や保育者の工夫，さらには子どもの変容について検討した．劇遊びのプロセスには領域の積み上げが要求されるため，年度当初からどのような保育が展開されたか，それまでの日常の保育の質が問われることになる．さらに，劇遊びの演目を設定する際には，子どもの興味，保育者の教育方針，園の期待の３者の立場から接点を見つけて，納得のいく活動を選択することが必要である．それには，まず保育者が鋭い勘を働かせて，子どもたちの中に潜在している興味や関心の対象を発見し，単なる興味や関心のレベルではなく，それを表現したいという欲求にまで育てていくことが重要である．練習においては，視聴覚教材によるイメージづくり，自由で主体的なリズム遊び（ダンス）を通しての選曲や配役，相互に見学して意見を述べ合うことでの修正，背景の制作や衣装着用によるイメージの共有化と構築，保護者の参観による臨場感など，状況に合わせて活用していくことになる．本番に当たっては，今までの努力を振り返り，自分たちは「できる」という実感を持たせることが必要である．発表後は成果を共有して，その後の活動への自信につなげることが大切である．劇遊びの効果は，自己表現，協同性・協力性において顕著だった．

藤野ら（2004）は，劇遊びの特徴として観客という第三の視点があることを挙げている．劇遊びの積み重ねが自信となり，観客に見てもらいたいという欲求を生じさせる．そして，観客がいるからこそ，表現することに喜びを感じるようになり，その姿に観客が感動すると考える．観客という第三者の存在が，子どもたちにより主体的で豊かな表現を生み出す瞬間をもたらすと考える．

保育者Ｓは自分自身の学びとして，「日々の子どもたちの姿が生き生きとしていて，何にでも興味を示し，取り入れようとしていることを改めて感じられた．一人ひとり違った感性をもち，表現方法も違う．しかし，その一つひとつを保育者がキャッチすることができ，共に感じ，思い，考え，悩み，行ってみることで，いろいろなものが見えてくる．保育者が子どもたちを導いているようだが，子どもたちが保育者の心を突き動かしてくれた．『生きもの』についても，子どもたちと学ぶ中で，保育者自身が新たに知ることも出てきた．子どもたちの視点に立ち，共感し合えることは何とも言えないほど新鮮であり，この上もない喜びであった．」としており，子どもからたくさんの気づきを得ていることを表明している．子どもたちと保育者のダイナミックな関わりを通して，劇遊びが有機的に展開していくと実感した．

引用文献

藤野友紀・成田美貴・世古由美・宮串尚江（2004）. 保育における劇遊び導入の発達的意義―北大幼児園 4, 5 歳児異年齢混合保育の実践記録をもとに― 北海道大学大学院教育学研究科紀要，93, 53-79.

南元子（1999）. 即興的な劇遊びにおける表現と子どものリアリティの捉え方―生活発表会にむけて活動した 5 週間の保育記録の分析―　愛知教育大学幼児教育研究，8, 35-43.

文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成 20 年 10 月，158-174.

八木紘一郎・喜多村純子（1982）. 劇あそびの条件(I)―4 歳児の実践活動とその VTR の分析および考察―白梅学園短期大学紀要，18, 45-66.

備考：この論文の内容，特に幼児の変容などの分類については，筆者らで検討し確認した．筆者らの 3 名は保育者養成校教員もしくは現場保育者であり，1 名は院生ではあるが幼稚園一種免許の取得者である．また保育者 S の勤務する園の 3 名の教員（保育経験 17 年目 1 人，4 年目 2 人）の確認をも取った．

（2015. 9. 30 受稿，2015. 10. 15 受理）

付録１．保育記録の抜粋と解釈

１）４～５月

記録１－１：進級当初からは，『遊び』の時間を重視して特に身体を使っての遊びを充実させた．初めはクラスの子どもたちに声をかけ自然に鬼ごっこを始める程度だったが，『遊び』が日に日に変化し，種類が増していった．クラス替えで半数が入れ替わったため，2クラスが合同で遊ぶ日を設けて友だち関係を育む機会を大切にした．その中で，園庭で転んだ友だちに，さっとかけ寄って，足の砂を払って「大丈夫？」と声をかける姿も見られ，少しずつ友だちとのかかわりも増えてきた．また，様々な色のクレヨンを混ぜてどのような色になるのかを興味を持って確認しており，年少時の絵具による色水遊びの影響と考えた．その中で，これもやってみたい！あれもやってみたい！という思いが一人ひとりに芽生え始めた．保育の中で，子どもの声をキャッチすることで，様々な活動の内容が膨らみ，いつの間にか保育者と子どもが一体となって楽しめていた．**（解釈：子ども一人ひとりが自由に体を使って遊び込み，遊びの種類が増えていく中で，友だち関係を育む機会を作り，意欲を育てる→保育者は子どもの発想をキャッチして遊びを膨らませて共に楽しむ）**

記録１－２：特に，リズム遊びでは，子どもたちが今まで体験したことを言葉で表現し，友達ともふれ合いながら楽しむことができた．また砂場遊びでは，川づくりが盛んで深くほり進めた所に水を流し，流れる様子を皆で息を飲んで見つめたり，「もう少しここを掘ろう！」と力を合わせて掘る様子も見られたりした．**（解釈：各領域が複合的に関連するようになり，ひとつの目的に向かって友だちと協力する場面も見られる）**

記録１－３：周囲に目を向けることで「発見」という言葉も出てきた．それはダンゴ虫を「発見」することであった．カップにたくさんのダンゴ虫を集め，保育者や友達に見せて歩く子がいた．また，触ると丸まることで子どもたちはドキドキしていた（事例1）．
（解釈：ダンゴ虫に興味を示す．ダンゴ虫の特徴：攻撃しないので安心してさわれる，地面を歩くし丸まると動かないので捕まえやすい，触ると丸まることで知的好奇心や自己効力感が生じる，形状から愛着が湧くなどで，「生き物」として子どもが最初に関わるには最適と考える）

２）６～７月

記録２－１：クラスでの生活もだいぶ慣れ，友だちとのかかわりも増えてきた．遊びの中や生活の中で，少しずつ『数』に興味を示すようになり，「○○くんはブロック7個もっている」「ぼくは6個」と数えて分け合ったり，ヨーグルトのカップに印字してある数を読んで「同じだね」と感じあったりする姿が見られる．**（解釈：友だちや保育者との安心した関係の中で周囲のことに気づく→その気づきを表現し共有する）**

記録２－２：テラスにつばめが2羽来るようになり，巣作りを始めた．雨でぬれた土を何回も運び「また来た！」と大喜び．日に日に出来上がる巣を見て，いろいろな気づきが出始める．「つばめさんががんばっているなあ…」など生き物への興味や関心が増していった．しかし，巣が筧に作られていたことから，巣が壊れてしまい，子どもたちは生きていくことの厳しさを学んだようである．

『クロスジカミキリ』を観察する子どもたちの姿から，『生き物』への子どもたちの興味や関心の強さを実感し，保育者はザリガニを捕えてクラスで飼うことにした．毎日の世話も子どもたちが喜んで行い，脱皮や共食いにより生きる」ことの力強さや残酷さを学ぶ（事例2）．自然とクラスで読む絵本も製作も生き物中心となっていた．「何だろう？」という疑問も抱き，「調べよう！」という姿も見られるようになってきた．
（解釈：ツバメやクロスジカミキリに強い関心を示す→『生き物』への興味を高めるために保育者の配慮でザリガニを飼育→ザリガニの脱皮と共食いで『生きる』凄さを実感→『生き物』への興味が高まり，調べる活動）

記録２－３：「ごっこ遊び」が盛んになり，役割をもって工夫して楽しめるようになる．その姿

は，１学期終わりの掃除の日にも現れ，お皿を洗う（おままごと）お母さん役や机を運ぶ（お父さん役）など，声をかけ合って協力して行えていた．**（解釈：ごっこ遊びが盛んになり，劇遊びの土台が形成）**

記録２－４：こうして１学期にたくさんの生きものと出会い，絵本や図鑑で調べたり，みんなで話し合ったりを基に，日々いきいきと過ごすことが出来た．そのなかで，子ども同士のかかわりや，保育者とのふれあいを基に子どもたち自らいろいろなことを「やってみたい」という思いが育まれたようである．**（解釈：「生き物」を媒介として調べ，話し合うことで意欲が育つ）**

３）９月

記録３－１：子どもたちは夏休みで体験したことを，待っていたかのように保育者や友だちに伝え，共感してもらえたことを喜んでいた．席替えをしてグループ名を決める様子からは，友だちと共に決めていく姿が見られるようになる．10月の運動会に向けての練習が始まり，友だちとの協力を意識させる競技として，手をつないでゴム段を跳ぶこととしたところ，自然と「せ～の～！」と声をかけ合っていた．組体操では，練習を重ねるうちに，自ら考える子や友だちを導く子が出てくるようになる．たとえば，最後のポーズで「1，2，3，ヤー！」と子どもたち全員が心の中でカウントしていることが伝わり，その姿に保育者も胸が熱くなった．**（解釈：夏休みの体験の共有→運動会の練習で協力・発案・リードなどが見られ，クラスのまとまりが強くなる）**

記録３－２：材料を用意してBBQをするなどの見立て遊びも，実体験を伺わせるものとなる．切紙遊びをすると，この形や色はどこかで見たという声が聞こえたり，「これと同じ」「こうしたらどうかな？」とアイディアをだしたり，子どもの思考の柔軟さに感動した．また，作る楽しさが今まで以上に感じられているのが分かる．5月に行った柏餅作り．その柏の木にどんぐりが実っていることに全員で感動する．また，葉の違い（5月の時とは色が違うなど）も発見する．折り紙で柿をつくると，男児が家から「これ食べられない柿！」と持ってきてくれた．しかし，その渋柿も実は食べられると伝えると，「あっ！おばあちゃんが皮をむいて干して食べるんだよ」と体験を伝えてくれる．運動会に使用する国旗以外に，他国の国旗があることを知り，図鑑で調べる子もいた．字が読める子は声に出して読み始めることもあった．**（解釈：実体験を基にした気づきが多くなり，疑問をもって図鑑で調べる子どもも出てくる）**

４）10月

記録４－１：「宣誓，○○くん」「はい！」と年長児の運動会の開会式に憧れて真似する子どもたち．その後，練習を重ね上手になった組体操へ．自信を持って取り組むようにもなり，どこか余裕も見られる．**（解釈：運動会で自信がつく）**

記録４－２：「さつま芋掘り」では，子どもたちが掘りやすいように蔓を刈り取っておくのが一般的だが，保育者の配慮であえて自然のままにしておいた．長く伸びた蔓を見て「すご～い！」と喜ぶ子どもたち．まずは根元の土を掘る子どもたち．そして，みんなで力を合わせて蔓を持って引き抜いた．「お芋！出たぁ～」と共にたくさんの笑顔．その芋を持ち帰り，園庭に広げた時にも「すご～い！長いぞ～」と蔓の長さに感動した．そして数えた葉っぱは合わせて87枚！それもみんなで分担して数えていった．植物の生命力を感じ取っていた．

また，事例3のように，カマキリのメスがオスを食べる様子を見て生きることの残酷さをも実感したようである．

（解釈：サツマイモ掘りでは，子どもたちは生命力を実感しカマキリの共食いから「生きる」残酷さを学ぶ）

記録４－３：R男の「先生，ザリガニもカマキリも共食いをしていたよね？じゃあ，動物は？」に対して，H男「え，だってライオンはシマウマを食べちゃうんだよ」．保育者は，子どもたちの“知りたい”に応えるため，図鑑やＤＶＤを用いて動

物の自然界を伝えることにした.「可哀そうだと思うけど，食べるものがないと生きられないんだよね？！」とK子．このように子どもたちが，生きものに興味を持ち，自ら知りたいと思い，心を動かす体験をしていることから，発表会のテーマを“『生きもの』としよう”と考え，子どもたちと相談して『ライオンキング』に決定した．**（解釈：野生動物に関心が拡大し，子どもたちの興味や関心からクリスマス会の演目を『ライオンキング』に決める）**

付録２．事例

事例１「ダンゴ虫との出会い」（5 月 28 日）

子どもたちは，外遊びに行く嬉しさから，ワクワクしながら上履きから靴に履き替えいざ園庭に！と飛び出していった．その後，数人の男の子たちが「先生！見て見て！！」，手には数匹のダンゴ虫が…．その子どもたちの顔はどこか“すごいでしょう！捕まえられるんだよ”と誇らしげであった．その姿を見た周囲の子どもたちが，「どこにいたの？」と興味を示し，ダンゴムシ探しが始まった．

「いたいた～！」「ここにもいるかな？」と花壇の近くの芝生をかき分ける．「いた～！ここには小っちゃいダンゴ虫がたくさん」 その声に，いままで少し怖がっていた女の子や年少児が集まってくる．「わ～，かわいいね．先生，このダンゴ虫お家にもって帰りたい．」

自分で捕まえられたことの嬉しさより，自分のものとしてとっておきたいのであろう．

しかし，「この庭が大好きで住んでいるダンゴ虫だから持っていくことはできないかな…．では，幼稚園の庭のどの辺に，どのくらいダンゴ虫がいるか探してみんなに教えてあげようか」と保育者が言うと，「うん！」ダンゴ虫を入れるカップを片手にあちらこちらで見つけることとなる．その姿は，宝物を探すかのようであった．

ダンゴ虫の魅力，それは葉っぱや植木鉢を持ち上げるときの「いるかな？いるかな？」というドキドキワクワク感なのである．また，“噛まない”こと，触るとクルンと丸くなることである．この頃の子どもたちのアイドル的存在の虫であった．

事例２「ザリガニの飼育：“あれあれ？ザリガニが増えた！減った？！”」（7 月 4 日）

子どもたちの生きものへの興味に感動した保育者は，延長保育の子どもたちと，ザリガニ獲りをしてクラスで飼育することにした．ザリガニ獲りをした子どもたちも大 2 匹，小 5 匹のザリガニに大興奮していた．

そして，次の日．子どもたちはいつものように元気に登園してきた．

「あっ，すごい！ザリガニだ．先生，このザリガニどうしたの？」「T：昨日の延長保育のお友だちと捕まえてきたんだよ」「すご～い」「見たい見たい！」

いつのまにかザリガニの周りは，好奇心旺盛な子どもたちでいっぱいになっていた．この日から子どもたちの話し合いにより毎日交代で“ザリガニ当番”が餌をあげたり，水を取り換えたりと飼育が始まった．ところがある日，登園してきたS男が目を真ん丸にして保育者の所にやってきた．

「先生，大きいザリガニが 2 匹じゃなくて 3 匹になってる！」「え～本当？」と，またクラスの子どもたちがぞろぞろと大移動．「ん？でもなんかちがうよ．あれ？しっぽがないもん．足も少ない…動かないじゃん」「本当だ，動いてない」

大きいザリガニの 1 匹が脱皮をしたのである．保育者は子どもたちにザリガニが大きくなるためには“脱皮”を繰り返すということを説明した．

そして次の日，またまたS男が「小さいほうのザリガニが 1 匹いないよ！あれ～どうしたんだろう．」よく見ると食べられた跡が…．“共食い”である．当番がきちんと餌をあげていたはずなのに…．子どもたちは，皮を脱ぎ捨てながら大きくなるという生きることの強さや，生きるためには仲間をも食べてしまうという残酷さを学んだようである．

事例３「2 匹のかまきり：“助けてあげて！”」（11 月 10 日）

「先生，カマキリがいたよ．でも 2 匹なんだけど，なんか食べてるんだよ．」 周囲の子どもたちも，“なんだなんだ？”と見に行くことになった．ところが，そのカマキリの姿に唖然とした子どもた

ち.「大変，大変，早く助けてあげて！先生」なんと，メスがオスを食べているところであった.「Ｔ：ん〜…．これはね，カマキリのメスがオスを食べているんだよ．食べられちゃって可哀そうなんだけど，これからこのメスはたまごを産まなければならないの．そのために，お腹いっぱいにしないといけないんだよね．先生が助けちゃうと自然の出来事を壊してしまうの．本当，可哀そうなんだけど…」「そっかぁ…」と返事をしつつも，じっと見る姿はしばらくそのままであった．ここでも，自然の厳しさを感じたようであった.